

聖書: マタイの福音書1章18~25節

説教: その名はインマヌエル

1 契約

1) アブラハム: 約束の地を与える

これまでアブラハム、モーセ、ダビデ、この三人の信仰者を取り上げながら、神が私たちに立ててくださった契約について見てきました。簡単に復習すると、アブラハムがまだ子どもが与えられていなかったときに神は「カナンの全土をあなたの後の子孫に永遠の所有として与える」と語ります。しかし実際にアブラハムが手にした子どもはイサク一人、土地とは言えば妻サラを葬るためのお墓だけでした。すばらしい契約は与えられたのに、具体的に目に見えるものはほとんどありません。

2) モーセ: 約束の地に連れ戻す

それからおよそ五百年経ったモーセの時代。神は、「エジプトで苦しんでいるイスラエルの民を救い出し、約束の地に連れて行く」と語り、四十年という月日はかかりましたが、イスラエルの民はカナンの地に戻ることにになります。しかし、それでも救い主のことはまだぼんやりとしたままでした。

3) ダビデ: 世継ぎの子を起こす

そしてそれからまた五百年ほど経ち、ダビデがイスラエルの王となったとき、神はこう語ります。「わたしは、あなたの身から出る世継ぎの子をあなたの後に起こし、彼の王国を確立させる。」それまではぼんやりとしていましたが、ここに至って約束の地の王となる方、すなわちこの方が救い主はダビデの世継ぎの子として来られることがはっきりしてきます。では本当にそうだったのか。

2 ヨセフ

1) 系図

まず1章1節を読みます。「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系図。」ときどき聞くことがあります。「聖書を読もうと思って新約聖書の最初を開いたら、いきなりカタカナの名前が並んでいて、そこで挫折してしまった。」知識なしでいきなり読もうとしても苦行です。しかし、先ほど挙げた三つの契約のことを知っているのだいぶ違います。イエス・キリストは突然予告なしで現れたのではない。アブラハム、モーセ、ダビデに語っていた契約のとおり、ダビデの家系に属して

いたヨセフの子として来られた。そのことがこの系図に表されています。

2) ひそかに離縁しようと思った

それはよいのですが、ヨセフにとっては大変なことになります。18節。「イエス・キリストの誕生は次のようであった。母マリアはヨセフと婚約していたが、二人がまだ一緒にならないうちに、聖霊によって身ごもっていることが分かった。」

「聖霊によって身ごもっていることがわかった」とありますが、これはマリアがわかったという意味。身ごもった理由が聖霊によるものであることを知っていたのは、この時点ではマリアだけであったことに注意してください。ルカの福音書1章で、御使いガブリエルがそのことをマリアに語っています。おそらく最初、ヨセフはただマリアが妊娠したとだけしか聞かされず、詳しい事情は知らなかったようなのです。

そうしますとマリアのことを聞いたヨセフがどんな気持ちだったのでしょうか。皆さんがヨセフだったらと想像してみてください。20節で「彼がこのことを思い巡らしていた」とあります。心穏やかに信仰をもって事態を受けとめていた、ではありません。当然のことですが、怒りであったり、失望であったり、とにかくぐるぐる心が千々に乱れる。そんな状態が続いていた。申命記に、婚約中の女性が夫以外の男性によって妊娠してしまった場合、石で打ち殺しなさいと書かれています。これが表沙汰になれば、ただでは済まないということです。ヨセフはまずそのことを考えた。しかしまたマリアは一度は結婚しようと思った相手です。自分はマリアに裏切られたけれど、これ以上、ことの是非を深く追求しないで、黙って赦すべきではないのか。それで、ひそかに離縁しようと思った。おそらくそんなことだったろうと思われれます。

3 主の使い

1) マリアを妻に迎えなさい

そう決めようとしていたとき、夢に主の使いが現れて二つのことを告げます。一つ目。20節。

「ダビデの子ヨセフよ、恐れずにマリアをあなたの妻として迎えなさい。その胎に宿っている子は聖霊によるのです。」

ここで初めてヨセフは、マリアの妊娠が聖霊の働きによるものであることを知らされたと同時に、自分たちが神の救いのご計画の中に巻き込まれたことに驚きます。

そして次の瞬間、自分のことを振り返ります。それまで自分はマリアのことをどう思っていたか。マリアが不貞を働いたと疑い、責めていた。それはとんでもない間違いであったことに気がつく。「ひそかに離縁しようとした」と考えたけれど、そう考えた真の動機はなんであったか。正しい自分が、罪を犯したマリアを赦して上げる。マリアの苦しみと一緒に苦しもうというのではなく、自分は関わりたくない。そのような自己中心的な動機だった。こんなふうにして、ヨセフは罪を示されていきます。「ヨセフは正しい人であった」とありますが、罪がなかったという意味ではない。罪が示されたときにその罪に向き合っている。それが神にとっての正しさになります。そのような経験を経て、神のひとり子を産もうとしているマリアと結婚する資格がある者として変えられていくのです。

2) その名をイエスとつけなさい

御使いが告げた二つ目のこと。21節。「マリアは男の子を産みます。その名をイエスとつけなさい。この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」

旧約聖書でヨシュアという名前の人が登場しますが、ヨシュアは「主は救い」という意味があります。このヨシュアのギリシャ語読みがイエス。その名前の通りにこの方は、ご自分の民を罪からお救いになる。

ヨセフはこんな話を突然に聞かされます。まさ自分の人生がこんなことになるとは夢にも思わなかったでしょう。イエスが産まれるときも、ベツレヘムには宿屋がなく、馬小屋で出産ということになり、産まれた後もヘロデ王からいのちを狙われてエジプトに亡命しなければならなくなる。神からイエスの子育てをまかされたことは光栄なことではありますが、その子どもが殺されるようなことがあってはならない。いのちをかけてイエスを守らなければなりません。選ばれるということは大変なことなのです。

北海道聖書学院の学生にもときどき言います。神の召しに従って献身し、学院に入ってきたかもしれませんが、神のご計画にあずかっていくということは、現実には甘いものではない。大変な苦勞をす

ると覚悟しなければならない。その覚悟がない者は早く学院を辞めたほうがよい。

4 インマヌエル（神が私たちとともにおられる）

1) ご自分の民を

そんな苦勞が待っていることを知りながら、なぜヨセフは結婚する覚悟をしたのでしょうか。自分だけ幸せになればよいという考えだったら、さっさと離縁した方が得策です。しかしヨセフは別のことを考えています。主の使いはこう語っています。「この方がご自分の民をその罪からお救いになるのです。」

神は、ヨセフとマリアはもちろんですが、ご自分の民の幸せを願っています。そのために、神は人となって来ようとしています。23節で引用されているイザヤ書7章14節のみことばの最後に、「その名はインマヌエルと呼ばれる」とあり、「神が私たちとともにおられる」という意味です。さきほどもイエスという名前の意味について触れましたが、聖書では名前はその人の人格を表すほど大切な意味をもちます。インマヌエルと呼ばれるイエスは、名前の通りに私たちとともにおられるということです。どういうことでしょうか。

こんな話を聞いたことがあります。初めて飛行機に乗った子どもの話です。その子どもが飛行機から降りたとき、こう言ったというのです。「お空には沢山雲があつたけれど、どこにも神さまはいなかった。」笑い話のようですが、神は雲の上から私たちを見おろしている、多くの方はそんなふうには思っていたのではないですか。ところが聖書の神はどこにおられるのか。赤ちゃんの姿をして私たちのところに来られ、人の世話を受けないと生きていけない、そんな小さな姿になられます。私たちと同じように、お腹も空きます。罪は犯しませんが、私たちがどんなことに誘惑されるか、その誘惑にどれほど弱いのか、全部経験されます。それがともにおられる、という意味です。

2) 罪から救う

その罪によって、私たちは死ぬべきものとなってしまいました。すべて私たちの側の責任です。でも私たちに、死に打ち勝つことは絶対にできません。神はこれをご覧になり、神のひとり子である方が私たちの罪を背負われて十字架でさばきを受けになり、ご自分のいのちを差し出して死んで行かれる。そして三日目によみがえられることによって、十字架を信じる者が罪から救われる道を備えて

くださいました。インマヌエルというのは、ただ黙って座っているとか、神棚に飾られて私たちを見おろしているという意味ではありません。いのちを捨ててまで私たちの隣人になってくれる。そのような意味です。

このクリスマスの日、私たちは「おめでとう」と言っ、主の御降誕をお祝いします。でも思い出していただきたい。赤ちゃんとなって来られた方は、どこに向かおうとしていたのか。その陰で、マリアとヨセフがどれほどのつらいところを通らなければならなかったのか。神が私たちを愛し、救うためにこのようにしてくださった。主の御名をあがめます。